次期和泉市総合計画　学識専門部会検討ビジョン

～イズミックス・ビジョン～

平成 27 年 1 月

目　次

1. 将来ビジョン検討の前提---------- 1

2. まちづくりの方針 ---------- 4

3. 和泉市の将来ビジョン（イズミックス・ビジョン）---------- 8

4. イズミックス・ビジョンの政策展開 ---------- 11

参考1：ヒアリングから得られたまちづくりの課題等 ---------- 12

参考2：学識者名簿 ---------- 18

参考3：ヒアリング及び専門部会の経緯 ---------- 18

1. 将来ビジョン検討の前提

和泉市の将来ビジョンを検討するに当たって、和泉市の特性（優位性、弱点、課題）を整理すると以下のとおりである。

（1）和泉市の優位性

近年、府内多くの自治体が人口減少傾向にある中、和泉市の人口は子育て世代の流入により増加を続けている。このため、全国的にも年少人口比率が高く、老年人口比率が低い、人口構成のバランスが良いまちとなっている。

また、和泉市は JR 阪和線、泉北高速鉄道、阪和自動車道、堺泉北有料道路（阪和自動車道、阪神高速湾岸線を連絡）を利用して京阪神各地と結ばれるロケーションに恵まれ、大規模商業施設や工業が立地し、交流人口も比較的多いと考えられる。

さらに、南部の豊かな自然環境や様々な歴史文化資源に恵まれ、各種公共施設も整い、日常的な生活や都市活動においては、過不足のない都市環境を有している。

そして、近年、地震や風水害などの自然災害や事故・犯罪から生命と財産を守ることが居住地選択の重要な条件となっている中で、和泉市は泉州地域で唯一海岸線を持たない市であるため、津波等による被害の懸念が少なく、また、過去に大きな災害履歴もないことから、「安心なまち」の要件を満たしている。

【主な優位性（部会意見）】

（人口規模・バランス）

〇人口規模がちょうど良い

〇人口は全体では微増、増えている地区と減っている地区があり、華やかさと衰退が同居している

〇現在は人口バランスがよい

（住民の特性）

〇和泉市は他市から流入した人が多い

〇ニュータウン（NT）には興味深い人が多い。（人の資源）

〇ほどよい、新旧が認め合って都市化しているまち

（市の個性・特色）

〇バランスが良く、突出したものがない

〇大規模商業施設が立地し、交流人口の吸引力をもつ

〇旧市街地、松尾寺、葛葉稲荷神社の楠、池上曽根遺跡、伝統産業、農業などに特色がある。

〇海と災害以外はなんでもあるまち

（2）和泉市の弱点

和泉市は、様々な面において一定の水準を満たしている反面、突出した特徴がないことから、泉州地域としての特色は有するものの、和泉市独自の都市イメージが希薄である。

また、他市から流入した定住人口の多くは子育て層がメインであり、宅地開発の時期や場所がばらついているため、地縁的なコミュニティが形成されにくい環境にあると言える。このため、既成市街地や集落、まとまった一団地の開発地区以外では住民相互の連携が弱くなる傾向にある。このため、大きな災害が起きたときの相互扶助、事故や犯罪を未然に防ぐ地域の見守りが十分に機能しないことが危惧される。

さらに、和泉市には池上曽根遺跡、久保惣記念美術館、さをり織りや人造真珠などの固有の資源に恵まれながら、市内外における認知度は低く、まちの魅力としてのポテンシャルを十分発揮できていないと考えられる。また、市を代表するだんじり祭は、先祖代々の町会組織単位で実施されているため、他市からの流入による定住者も含めた全市民の誇りや情熱とはなっていない。

【主な弱点（部会意見）】

（市のイメージ）

〇泉州の特徴はあるが、和泉市の特徴がない

〇農家、歴史もあるが、古い、ボヤッとしている（空間的、時間的）

〇閑静な住宅街ではない（芦屋、西宮とはちがう）

〇堺と岸和田の間に挟まれて和泉としての色がない

〇交通条件やロケーションを生かし切れていない

（市民の参画）

〇市民共通の話題・課題がない

〇ニュータウンには市民参画にこだわりの強い人が多い

〇同じまちに、さまざまな時期に定住した市民が住んでいる

〇30～40 歳代の元気な女性に出会わない。活躍できる場がない。人がいない。

（財政の特徴・将来見込）

〇単身、高齢化は財政の出動が増える

〇他市に比べ扶助費の割合が多い

〇緩やかな人口増の都市であってもまちづくりのコストは変わらない。山谷がない分、気づかないうちに問題が大きくなり対応が難しくなることもある

（3）和泉市の課題

和泉市は総じて、大きな弱点や課題を持たない反面、際だった特徴がなく、関西や全国といった広域レベルでは隣接する堺市や岸和田市に比べ知名度はあまり高くない。それでもなお、子育て世代が転入する理由としては、ゆとりのある住宅空間と大阪都市圏の各拠点へのアクセシビリティの高さ、他市に比して遜色のない子育て支援などがあげられる。これらの要因が他市と比べ優位な状況が継続すれば、少子化の影響で転入者数が低下し総人口が減少しても、子育て層の転出超過にはならず、相対的に良好な人口構成のバランスが保たれると考えられる。

しかし、子育て以前や子育てを卒業した世代の定住も重要であり、これらの世代にも和泉市に「住みたい」、「住み続けたい」と思われるためには、世代に応じた居住条件や魅力を提示していくことが求められる。

そのためには、新たなまちの魅力を創造、または既存の魅力を充実する必要があり、その方法としては、和泉市の持つさまざまな資源をつなぎ、相乗効果を発揮することが効率的で高い効果が期待できると考えられる。

【主な部会意見】

（市民に関すること）

〇人と人、地域と人を結びつけることができる人材が育っていない
〇20～30 歳代の住民に地域への関心を持たすことが大切
〇愛着、日常性を大切にする。伝えていけるものをさがす
〇地元の祭りなどに新住民がまちに参加できる仕組みが必要
〇かけ声で市民は一つになれる
〇元気モンが三人寄れば何かができる

（必要な取組みに関すること）

〇資源を結びつけることが重要
〇交流空間などのマッチングによって地域を活性化
〇多様性による交流を促進する
〇6次産業化などによる地場産業の元気を市内全域に生かしていく
〇市の顔としての和泉府中周辺、ニュータウンの核としての和泉中央、近郊農村としての南東部のまちづくり方針を確立し、これらを結ぶ連携軸づくりが必要
〇和泉府中周辺と和泉中央周辺のまちをつないで、「オール和泉」を創る工夫が必要
〇外から来る観光客やアグリツーリズム等、外圧をうまく使った域内交流の仕掛け作り
〇新と旧の融合、地理的融合を図る
〇都市と農村の交流を活性化させることが必要

（アピールすべきこと）

〇さまざまな資源を内外にアピールする
〇まちの安定性、利便性をアピールする
〇子育て世代向けに「仲間がいる街」を実現、アピールする
〇歴史と郊外生活文化と農山村文化が共存していることをアピール

2. まちづくりの方針

情報化やボーダレス化が進展し、価値観の多様化が定着してきた成熟化社会において、人々が普遍的に求めるのは「安心」であると考えられる。「安心」は、生活・健康・教育・環境・防災など、様々な分野で幅広く求められており、これから本格化する人口減少社会においても、人々が集い、にぎわいが持続する「選ばれるまち」を実現するためには、心の安らぎを感じながら生活を送ることができる『安心力』の高さが求められる。

和泉市は、古来より継承される歴史、文化、生活スタイルが残る一方で、新興住宅地、企業団地、大規模商業施設などが新たに立地し、新旧地域がモザイク状に併存するまちである。地域はそれぞれの個性を持ちつつも過度に主張せず折り合っており、その結果、市全体のイメージは曖昧なものとなっている。今後の和泉市においては、恵まれた自然、歴史、ロケーション等の魅力を融合し、バランスの良い人口構成というアドバンテージを最大限に生かした特色あるまちづくりと併せて、様々な世代が「安心」を実感できる『安心力』の高いまちづくりが重要である。

以上のことから、和泉市が『安心力』の高いまちを目指すための「まちづくりの指針」を以下の3つの『つなぐ』とする。

1. 人をつなぐ

人をつなぎ、地域間・世代間の融合を図ることにより、地域における課題解決力と安心力が高まる。

自然災害などを教訓として地域の絆の大切さが見直されている。和泉市は、これまで着実に人口が増加してきた都市であるが、その結果、人と地域が新旧混在するまちの構成となっている。これら様々な地域の、様々な世代の人が交流することにより支えあいによる地域コミュニティが形成され、より「安心」を身近に感じることができるまちづくりを進めることができる。

2. 資源をつなぐ

資源をつなぎ、市民がまちの魅力に触れ、活発に行き交う仕組をつくることにより、地域と産業の活性化が図られる。

オンリーワンの魅力づくりが求められるなか、地域資源の発掘やプロデュースによってまちのイメージを高めることが重要となっている。和泉市は、古くは和泉国の中心地であったが、現在は、大阪都市圏の一住宅都市であり知名度は高くない。歴史、自然や産業等の固有資源を有効につなぎ、複合的に魅力を創出することにより、まちのブランド力の向上と地域・産業の活性化を図ることができる。

3. 世代をつなぐ

次世代にまちの「強み」を継承し、子どもたちが誇りと愛着を持てるまちづくりを行うことにより、人口減少社会においても持続的に発展可能なまちの実現が可能となる。

少子高齢化が進展するなか、人口減少に歯止めをかけ、地域で住み続けることができる環境整備が求められている。和泉市は、これまでの子育て世代の流入により人口バランスが良いという優位性を有している。この優位性を生かし、若い世代が安心して出産・子育てできる環境の整備と特色ある教育環境の構築により、子どもたちが和泉市に誇りと愛着を持ち、いつまでも住み続けたいと思うまちを実現することができる。また、急速な高齢化に備え、市民の健康寿命を延伸するための取組みも併せて必要である。そして、こうして生じる和泉市の「強み」を次世代に引き継ぐため、将来へ負担を転嫁させない都市経営の仕組みづくりに積極的に取り組むことが重要である。

＜「つなぐ」の効果イメージ＞

①「人をつなぐ」

和泉市の特徴	
《強み》	《弱み》
○他市から流入した子育て世代の人が多い ○さまざまな時期に定住した市民が住んでいる ○ニュータウン（NT）には興味深い人が多い。 ○ほどよく新旧が認め合って都市化しているまち ○市民の活動拠点となる施設が整備されている	○市民共通の話題・課題がない ○30～40 歳代の元気な女性に出会わない。活躍できる場がない ○人と人、人と地域を結びつけることができる人材が育っていない ○だんじり祭りなど地域固有の文化が全市で共有できていない

社会背景
○核家族化の進展による関係性の希薄化が問題 ○東日本大震災を契機として「きずな」の大切さが大きくクローズアップ ○共助の意識を高めることが必要 ○まちづくりに、様々な知識や経験を有する団塊の世代の参画が重要

人をつなぐ

人をつなぐ効果
◆市内の活動拠点（コミュニティセンター、和泉シティプラザ、南北リージョンセンター等）を中心とした市民活動が活発化する ◆生涯学習に取り組む人が増え、いきいきと暮らすことで健康寿命が延伸する ◆自主防災組織が増加して共助意識が高まり、防災力が向上する ◆「市民活動支援」制度を積極的に活用し、市民が、自立的・自発的につながり、NPO 団体が増加する ◆地域で地域の人を見守る仕組みができ、子どもや高齢者が安心して生活を送ることができる ◆世代間交流（福祉、教育、防犯・防災など）が拡大し、多くの人が知識や技術を身につける ◆自治会、NPO など各種団体の協働による取組が充実し、地域における課題解決力が向上する

②「資源をつなぐ」

和泉市の特徴	
《強み》 ○大規模商業施設が立地し、交流人口の吸引力を持っている ○旧市街地、松尾寺、葛葉稲荷神社の楠、池上曽根遺跡、伝統産業、農業などに特色がある ○交通条件に恵まれている ○市南部には豊かな自然が広がっている ○歴史と郊外生活文化と農山村文化が共存している	《弱み》 ○バランスが良いが、突出したものがない ○泉州の特徴は有しているが、和泉市としての特徴がない ○農家、歴史もあるが、はっきりとした印象がない ○堺と岸和田の間に挟まれて和泉としての色がない ○交通条件やロケーションを生かし切れていない

社会背景
○ナンバーワンからオンリーワンへ（価値観の多様化） ○都市間競争（シティセールス）の時代が到来 ○ICTとグローバリゼーションの進展

資源をつなぐ

資源をつなぐ効果
◆地場農産物の6次産業化によりブランド化が進み、農業が活性化する ◆体験型農業の取組により、市街化地域と山間地域との住民交流が活発化する → 市民が市内で休日を楽しみ、過ごす時間が増える（市民が市内を行き交う） → 南部地域の特性を生かし、まちの活性化が図られる → 商業・農業が活性化する → 起業や就労が促進される ◆商工業・農林業の振興により担い手が育つ ◆国道480号のバイパス化により、和歌山からの交流人口が増加する → 大規模商業施設の進出など、新たな集客力を生かしたまちづくりが進む ◆桃山学院大学との連携が強化され、地域福祉の充実や地域産業の活性化が図られる ◆和泉市の歴史・文化に愛着と誇りが深まり、市民が和泉市の魅力を再発見する ◆ICT技術の活用により、市民の利便性が向上するとともに、市民間の情報共有が図られるほか、市外はもとより、国外への情報発信が進む

③「世代をつなぐ」

和泉市の特徴	
《強み》	《弱み》
○人口規模がちょうど良い ○現在は人口バランスがよい ○公共施設が充実している ○他市と比較しても、大きな財政的課題がない	○市域全体では人口は微増であるものの、増えている地区と減っている地区がある ○他市に比べ扶助費の割合が多い ○緩やかな人口増の都市であってもまちづくりのコストは変わらないため、気づかないうちに問題が大きくなり対応が難しくなることもある ○愛着、日常性を感じ、将来に伝えていける象徴的なものが少ない ○20 歳代、50 歳代が流出超過傾向にある

社会背景
○少子高齢化、人口減少社会の到来 ○東京一極集中、若年層の流出を防ぐ取組が重要 ○環境問題の深刻化 ○地方分権が進展しにより、自律した都市経営が必要

世 代 を つ な ぐ

世代をつなぐ効果
◆安心して子育てができる環境が整い、新たに子育て世代が転入する ◆地産地消が進み、学校給食の充実により、子どもたちが健康に育つ ◆高齢者の就業や生涯学習が充実し、健康寿命が延びる ◆豊かな自然の保全と活用が進み、身近に自然を感じて暮らす市民が増える ◆健康寿命の延伸により医療福祉費用を抑えながら、効率的な行財政運営を行うことより、次世代の将来負担が少ないまちとなっている

3. 和泉市の将来ビジョン（イズミックス・ビジョン）

これまでの意見をまとめると、学識検討部会における次期和泉市総合計画の「将来ビジョン」は次のとおりとなる。

＜求められる「安心」＞

価値観の多様化が定着してきた成熟化社会において、人々が暮らしの中で普遍的に求めるのは「安心」である。「安心」は、生活・健康・教育・環境・防災など、様々な分野で幅広い世代が求めるものであり、これから本格化する人口減少社会においても、人々が集い、にぎわいが持続する「選ばれるまち」を実現するためには、心のやすらぎを感じながら生活を送ることができる『安心力』を高めることが重要である。

和泉市は、市民が「安心」を享受し、豊かさを実感することができるまちづくりに取り組む。

＜「人」をつないで増進する『心の健康』＞

東日本大震災を契機として「きずな」の大切さが大きくクローズアップされ、災害時の相互扶助や地域における見守りの重要性が増している。和泉市は、これまで着実に人口が増加してきた都市であるが、その結果、人と地域が新旧混在するまちの構成となっている。そこで、「人」をつなぐことにより、様々な地域の、様々な世代の人が交流し、支えあいによる地域コミュニティがより一層強化され、自主防災組織やNPO法人が増加するなど「安心」を身近に感じることができる協働のまちとなっている。

また、市内の活動拠点を中心とした市民活動が活発化し、世代を超えて生涯学習に取り組み、生涯にわたって生きがいを持ち続ける人が増え、心豊かに暮らすことができるまちとなっている。

このように、10 年後の和泉市は、「人」をつなぐことにより、市民が「やすらぎ」を感じることができるまちとなり、市民の『心の健康』が増進している。

＜「資源」をつないで増進する『地域の健康』＞

オンリーワンの魅力づくりが求められるなか、独自の地域資源の発掘やプロデュースによってまちのイメージを高めることが重要となっている。和泉市は、古くは和泉国の中心地であり、池上曽根遺跡をはじめとする歴史資源、恵まれた自然環境、地域に根ざした地場産業や農林業など固有の資源を有しているが、現在、必ずしも知名度が十分に高いとはいえない。そこで、市が有するさまざまな「資源」をつなぐことにより、複合的に地域の魅力が創出され、産業のブランド力も向上し、市内で楽しい休日を過ごす市民が増えている。また、市民が市内にある資源の魅力を再発見することにより商業や農業の振興が図られ、その担い手の育成と新たな雇用創出が進んでいる。

このように、10 年後の和泉市は、「資源」をつなぐことにより、市民が和泉市の歴史・文化に愛着と誇りが深まっており、また、地域の産業はブランド化が進むことにより知名度が上昇し、市外からの集客力が向上するなど、和泉市のポテンシャルを十分に発揮した活気あふれるまちとなり、『地域の健康』が増進している。

＜「世代」をつないで増進する『まちの健康』＞

少子高齢化が進展するなか、人口減少に歯止めをかけ、地域で住み続けることができる環境整備が求められている。和泉市は、これまでの子育て世代の流入により人口バランスが良いという優位性を有しており、人口減少社会の本格化に備え、その優位性を最大限に生かしたまちづくりが重要である。そこで、「世代」をつなぐための取組を行うことにより、次世代にまちの「強み」を継承できる持続的に発展可能なまちとなっている。具体的には、若い世代が安心して出産・子育てできる環境と、子どもが伸びやかに成長することができる教育環境の整備が進み、子どもたちがいつまでも住み続けたいと思うまちとなっている。また、急速な高齢化に備えて、市民が介護や病気の予防に取り組み、健康寿命が長いまちとなっている。そして、市民生活を支える行政については、効率的な都市経営の仕組づくりに取り組み、将来へ負担を転嫁させない組織となっている。

このように、10 年後の和泉市は、「世代」をつなぐ取組を積極的に推進することにより、多様な世代の市民が、豊かな自然環境のもと安心して健康的な生活を送っており、そして、子どもたちの笑顔が絶えないまちとなっている。また、行政についても、時代のニーズに即した市民サービスを展開しながら健全な財政状況を堅持しており、様々な『まちの健康』が増進している。

＜『健康』が融合する『安心力』の高いまちへ＞

「人」、「資源」、「世代」をつなぎ、和泉市は、様々な『健康』が生まれるまちとなっている。そして、これらの『健康』を融合させることにより、地域間・世代間の交流が活発となり、相乗的に効果と新たな魅力が生み出され、市民や地域、文化、産業、行政に大きな活力を与える。それは、更なる「ゆとり」となり、多様な世代が交流を図りにぎわいを保ちながら、子どもたちは夢をふくらませ、若い世代は結婚・出産・子育ての希望を叶え、高齢者は健やかに暮らすことができる、『安心力』の高いまちが実現している。

少子高齢化が進展し、人口減少社会が本格的に到来する時代においても、「安心」を享受し、様々な『健康』を実感できる和泉市は、市民は「いつまでも暮らしたい」、市外の在住者からは「住んでみたい」と思われる、様々な人から「選ばれるまち」となっている。

「イズミックス・ビジョン」名称の由来

和泉市は、古い歴史文化、豊かな自然を有しながら、道路や鉄道網も整備された利便性の良いロケーションを背景に人口が増加しており、また、新たに大型商業施設が進出したほか、和歌山へつながる国道 480 号バイパスの開通も予定されるなど、日々新たな魅力が加わっているまちである。

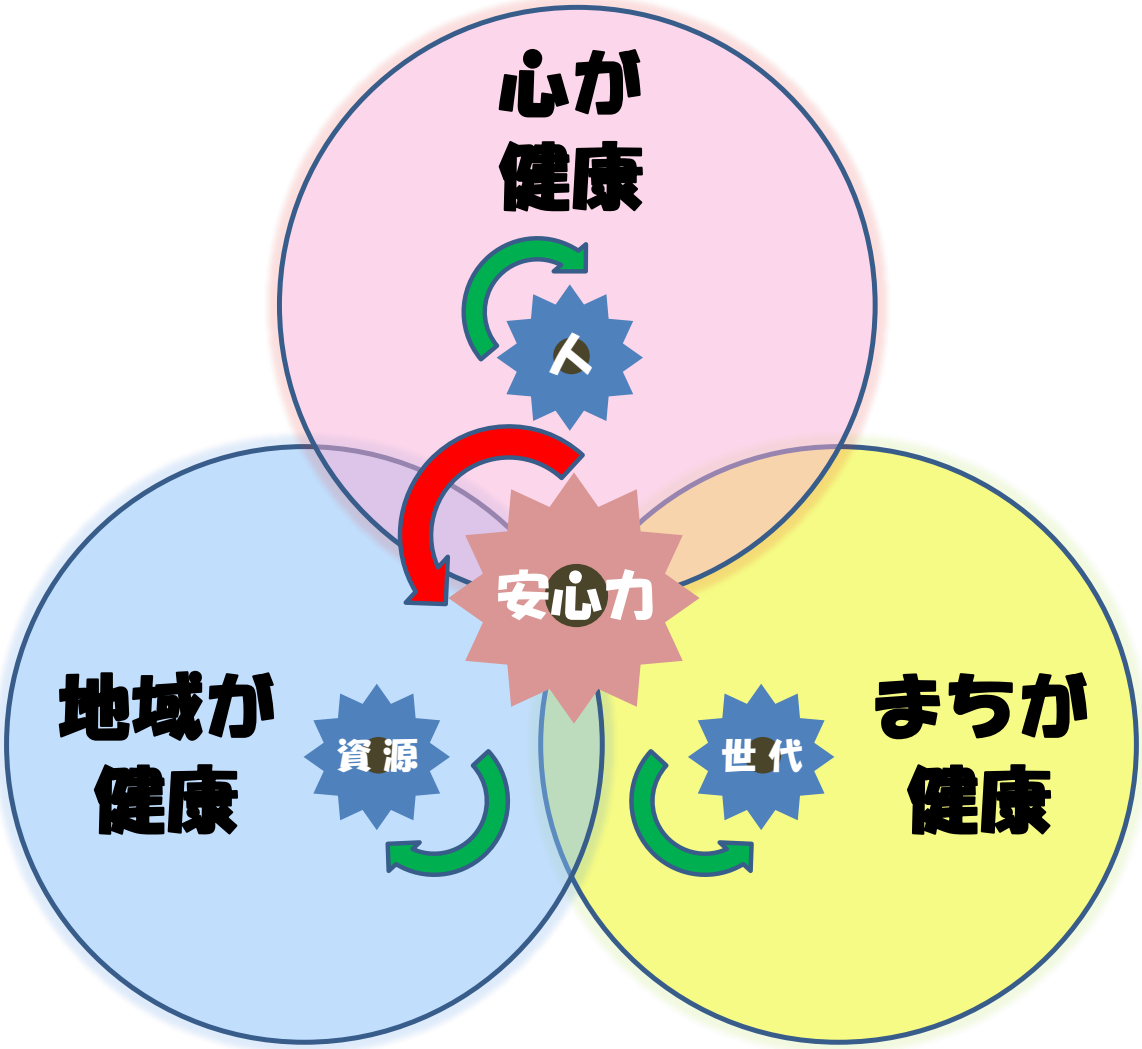
しかしながら、それらの魅力について市内外の認知度は低く、ポテンシャルを十分発揮できているとはいえない。また、人口の増加に伴い、宅地開発の時期や場所がばらついているため、地縁的なコミュニティが形成されにくい環境にあり、資源や人口のバランスの良さが、逆に都市イメージを希薄にしている。

そのことから、市民交流の活発化を図り、すでに有する多様な資源を効果的につないで様々な「融合」に取り組むことにより、新たな魅力を複合的に生み出しながら、将来ビジョンの実現に向けて発展し続けることができるまちづくりが可能になると考える。

そこで、「和泉市（イズミ）」と「融合（ミックス）」を掛け合わせ、次期和泉市総合計画のビジョン名を「イズミックス・ビジョン」とした。

安心が織り成す　健康実感都市

～心が健康、地域が健康、まちが健康～



5. イズミックス・ビジョンの政策展開

イズミックス・ビジョンの実現に向けて必要となる政策展開を示すと、下記のとおりとなる。

安心が織り成す　健康実感都市

① 「暮らし」をつなぐ 【心が健康】 【地域が健康】 【まちが健康】	それぞれの世代の暮らし方にあったまちの魅力を向上し、市外の人からは「住んでみたい」、市内に住む人からは「住み続けたい」、進学・就職などで一旦和泉市を離れた人からは「また帰ってきたい」と思われるまちをめざす。
②「魅力」をつなぐ 【地域が健康】	和泉市が内包する様々な資源をネットワーク化することにより、交流都市としての潜在力を高め、市内外の人が集い、賑わいと活力があふれるまちをめざす。
③「命」をつなぐ 【心が健康】 【まちが健康】	減災のまちづくりや消防力の強化はもとより、市民の災害に対する意識の向上によって、いざというときに協働で備える安全・安心のまちをめざす。
④「絆」をつなぐ 【心が健康】	日頃の交流を大切にし、お互いが顔見知りになることで、非常時における近隣住民同士の支え合い、地域の文化や風習の継承、地域課題の解決などに地域で取り組めるまちをめざす。
⑤「仕組み」をつなぐ 【まちが健康】	多様化・複雑化する市民ニーズに対応するため、分野別に専門化・特化した組織を横断的に結ぶとともに、職員の政策形成能力を向上する。また、健全で持続可能な財政運営を進めるため「コンプライアンス」と「アカウンタビリティ」を高める。

参考1:ヒアリングから得られたまちづくりの課題等

① 住人口増の課題

《定住のための基本条件（「働く」「育てる」「医療」など）》

○人口減の要因は就職、大学進学であるので、帰ってきたい、生活拠点を和泉市中心にできるかどうか。

○福祉（生活）と産業（経済、商店街の活性化）はセット、一体である。

○子どもが産まれて育っていくことが大切で、①その地域で働ける経済②子育て、医療保育、子どもが病気になっても安心なことが大切である。

○住むまちを選ぶ要素は、①教育②医療③住環境である。

○産業を整備しないと人は定着しない。

○40～50 歳の終の棲家になる施策が要る。産業、雇用のあるところに通える和泉のイメージである。

○子育て世代にとって、医療は大切な視点である。

○転入者は負のイメージをもっていないはずである。その市民に和泉市を気に入って居ついてもらう。

○暮らし密着のまちづくり大規模商業、マイカー買い物難民、生協宅配、移動販売など多様なサービスが受けられる便利なまちづくり。

○災害がない、地盤が強い、津波が来ない、臨海工業地帯がない。

○他所から来た人をとどめることが大切。地方中枢拠点都市圏構想のように、人口流出を押しとどめる工夫をする。

○①大学卒業後大阪で働ける、②転職組を取り込む、③リタイヤ組が活躍できる環境を創り出す。

○介護、医療職が安定してくる。職の確保につながる。

○60 歳代後半の安定した年金受給者層をつかまえておくことで、地元の経済が活性化する。

○南部と北部の特色を踏まえ、人を減らさないまちづくりを実現する。

○和泉市を出た人、入ってくる人の理由を確かめることによって、まちの魅力を探る。自然増減は特殊出生率によって人口の傾向は分かるが、改善を確かめるにはタイムラグが大きい。社会増減はリアルタイムに分かる。少子化は 30 年経たないと成果が分からない。社会増減の動向を見極め、転入増に結びつける。

《若い人を対象とした施策の重要性》

○20～30 歳代に、地域に関心を持たすことが大切である。ララポートのように新しい何かが来ないと･･･次につなげていけるかが課題である。

○若い人のライフスタイルを踏まえた施策でないといけない。

《文化歴史と地元への愛着の重要性》

○日本全国、歴史はあるので、拾い上げて行くことが大切である。そうすれば、愛着、日常性を大切にする。伝えていけるものをさがす。

○歴史にふれあう、だんじりサポーター、遺跡ガイド、農業、伝統工芸に町を挙げて取り組む。

○資源を結びつけることが重要である。

《高齢社会対策など》

○余力があるうちの医療福祉施策、主婦層の就業機会づくりや生きがい就労施策が必要。

○健康寿命の延伸、元気高齢者づくりの仕掛けが重要になる、一方で介護は必要でありケアが必要な人をサポートする。
○特養待機者の住まいと、見守り支援を確保する必要がある。21 の小学校区できめ細かなまちづくりを進める。

②子育ての課題

○学童保育は、対象学年の上限を小学校3年生までを4年生まで引き揚げると、鍵っ子にしなくて済むという安心感がはたらき、効果がある。
○商店街活性化、子育て母用空き店舗、子供の交流空間などのマッチング。
○多様性による交流。小学校はマンモス校から 30 人学級まで、競争させるのも考えられる。
○ニュータウンの公的賃貸を近居施策に活用する。

③シティプロモーションのアイデア

○うまくPRにつなげていくか、ゆるキャラが地域回帰のきざしである。
○「クリエイティブ資本論」で都市ランキングのキーワードは、テクノロジー、タレント、トレランス（寛容性）である。その結果、ナンバー1は、オースティン、日本では、町田、三鷹、神戸、芦屋、西宮が上位にくる。
○子育てしやすいまちのアピールの方法例：子育てセンターでは、育休中やママ友等をターゲットにし、手づくりで、地域で支援するイベントを企画開催する。
○制度の項目の比較は、有るか無しかで居住選択者の評価が決定的に違う。指標を工夫する。
○身近な公園が多いことを強調したい場合、「1市民当たりの公園面積」よりも、「ヶ所数」をアピールする。
○誰に対して、どういうイメージを、戦略的に考えることが大切である。
○生活文化的な視点で、阪神間にあって和泉市にないものは何かを探す。
○野球等のスポーツなどは、地域文化になる。それをほじくり出すことが必要ではないか。
○まちのイメージにつながる農業、工業の育成が重要。
○イメージアップがシティプロモーションの柱になる。有名な資源が実はあるが知られていない。「せんしゅう」というときつく聞こえ、「いずみ」というほうがやわらかく聞こえる。資源はあるが、どうアピールするか。
○町の安定性、利便性をアピールするための総合的なコミュニケーション戦略とする。
○子育て世代向け→仲間がいる街、子育て支援の充実をアピールする。
○地元住民向け→安心して老いることができる街、文化的ストックもあり自慢できる街をアピールする。
○「泉州らしさ」と「泉州らしくなさ」をうまく使い分ける。
○景観整備、街の名所発掘。新住民らが愛着を高めるための諸施策を検討する。
○和泉市出身著名人を発掘する。
○歴史と郊外生活文化と農山村文化が共存することをアピールする
○田舎との接点、農業体験、週末田舎暮らし、を市内で体験できるまちが和泉市。
○「とかいなか」などの、うまい表現をつくる。
○岸和田市は固まっているが、和泉市は固まっていないので、新しいことが実行しやすい
○ビジュアルに留意してPRが必要である。
○和泉が府中であることに誰も反論しないが、中心ではないことも理解している。うちのまちは、ここから

スタートするということが言えたら良い。

○白いキャンパスにどんな絵でも描くことができる。

④少子化対策

○子ども増のためには女性の社会進出よりも夫の給料で安心して生活できることのほうが大切。

○ハード面では母の集いの場所を整備する必要がある。

⑤産業の動向と可能性

○情報産業から農業産業の時代である。ファッション農業もありえる。

○産業振興ビジョンを構築する。

○地場産業、生きがい就労、起業支援他。なんとなく産業政策が弱そう。

○桃山学院大学では農学部を創設する構想がある。周辺には農地があり、休耕田、ミカン、ミズナス等の産地である。地場産業を絡めて6次産業化をめざしていく。その元気を市内全域に生かしていく。横山高校の活用に農業支援の施設があるようで、連携しながら農業インターンシップができればよい。（学部で伸びているのは、農、医、看護）

⑥ビジョン検討の方法

○ファストキャスティングとバックキャスティングのセットで考える。地獄絵も必要である。

○向都離村の時代は終わっている。大都市近郊でＩターン者の受け入れを考える。志（個人的動機）のある人を0人から1人にすることに価値がある。

○オリジナル、スリム化、が重要。

○新たな計画は方針のみ書けば良い。

○市民目線が求められる。

○人口が減るのは必ずしも悪いことではない。むしろ人口バランスを維持することが大切。人口総量の増減より他に目を向けるべきことがある。

○総合計画は市民と職員の翻訳装置であるべき。

○総合計画は市民も職員も自分の興味のあるところしか見ない。海士町の場合、「福祉」という単語を使わないことで、特定の頁ばかり見ないように仕向けている。

⑦まちづくりの動向と方向性

《まちの構造》

○これからまちづくりの大切な視点は、①低・省エネ　②エネギーづくり　③幸（安心感、防災、生業）である。

○コンパクトシティは面からではなく、線（幹線道路沿い）や点（集落）で手堅く進めることがポイントである。

○駅前や旧市街地にはシニアタウンを形成する。居住者が、高齢化すると山から駅前に移動していく。居住者を確保するイメージとして、介護、医療に心配が要らないことが大切である。

○自然を基盤に、水は生命の根源で、川、流域を骨格に考えていく。海までつながった生活、山と海をセット化した文化を大切にする。

○治水、利水、親水、環境（生物の多様性）の視点で考えていく。緑地のインフラとしての意味が大切である。尾根は水軸、景観を形成する。親水性、生態性、非常時の軸になる。ミニスーパー堤防、

堤内地を公園、レクリ活用に整備が出来れば望ましい。

○鉄道沿線イメージとしては、泉北高速鉄道は新住民、JRは旧来の居住地拠点であるならば、両方つなげていき、両方の魅力をアピールしたほうがよい。

○郊外住宅地の成熟化対策が必要。

○旧市街地、郊外住宅地、農山村地域ごとの施策検討が必要。

○市の顔としての和泉府中周辺、ニュータウンの核としての和泉中央、近郊農村としての南東部のまちづくり方針確立とこれらを結ぶ連携軸づくりが必要。

○府中と泉北のまちを結んでいるのはバスだけ。どうつないでオール和泉を創ることができるか工夫する。

○和泉市は、自動車、鉄道ともに交通条件はよいので、2次交通の整備が大切である。

《まちの魅力化》

○旧市街地は、物語を作って歩道、自転車道で結ぶ。実は、道が狭い、密集している空間を歩くのが気持ちがよい。

○歩きやすく、歩きたくなるまちづくりが望ましい。通学路は、地元の人が張り番をするソフトの仕組みが有効である。

○回遊性をブランド化していく。欧州のヒストリックセンターは1㎞四方を歩行者天国にしている。気分がよいので商業も人も入ってくる。地元の人の車は入れる。パブリックスペースをプライベートスペースにしていく。

○住民人口とともに観光客も含め交流人口をアピールしていく。

○「都会」、外から来る観光客、アグリツーリズム、外圧をうまく使った域内交流の仕掛け作りが必要である。インバウンドは新たな財布が落ちてくるという成長線戦略である。

○広域拠点となる施設の誘致を検討する。

○岸和田のように景観資源の街角投票をしてはどうか。全国的に景観行政が進んでいる。

《ストック活用》

○南大阪には旧家が多く残っている。空き家も含めて建築基準法等との関係から改修リフォームに力を入れるのがよい。

○空き家の活用は研究、検討することが大切である。

○ニュータウンはバブル景気の頃造られたので品質が良い。ストック活用すべき。

⑧将来ビジョンのキーワード

○住んで良し、訪れて良し、再び訪れたくなるまち。

○ちょっと、もう一回、ちょっとおもしろいことがあるまちの感覚。

○地味だけれど住みやすい、地味だけけれど子育て一番まち。

○“けっこう和泉”。熱海があつい、若者受けしている。“けっこう熱海”で旅行ツアーを売り出している。“わざわざ伊豆”も売り出すそうだ。

○バリアーフリー都市、ユニバーサル都市のイメージはどうか。

○山と農の魅力、農、山と共生できるまちのイメージが出せれば、そのようなまちで子どもを育てたいとなり、子どもも家族も楽しい。安全な地産地消、健康志向がキーワードになる。

○世代間交流、ライフスタイルを提示していく。例えば、農と共生できる生活ができるなど。自然、生活文化、コミュニティから健康へ。環境、経済、社会から健康へ。健康なライフスタイルの創造ができる。環境の健康につながる。

○和泉（泉州）のまちなんだけれども一番和泉（泉州）らしくないまち、ベタな和泉なら南海沿線へ。
○安全・安心に和泉文化を楽しめるまち。
○持続可能な郊外生活ビジョン（仮）の構築する。
○子育てと田舎暮らしをセットで促進する。（事例：伊達市）
○包容力のある伝統のまち、といったキャッチコピーが考えられる。
○和泉には海以外はある、バラバラ、グチャグチャ、混在の状況である。「トカイナカ混在魅力都市」（川西市では夢現都市とした）。相互に、「パラドックスシティ」、「イズミックス」10プランを設定し→オールイズミへ。
○創造都市、コンパクトシティ、減少都市がキーワード。
○のびるのは郊外である。

⑨地域連携、協働

○新旧融合できる祭り、イベントが出来ればよい。各地区の人材が一同に会せるしかけがよい。
○伸びるところは伸ばし、伸びないところをどうカバーするか。新と旧の融合、地理的融合を図る。
○固有の特性に新たなエネルギーをつなげる工夫がいる。
○地元の祭りに新住民が参加できる仕組みが必要。
○過疎地域と人口増地域をオール和泉で対応することが望ましい。
○近代型自治会、お互いの良いところを使うような仕組みが必要。
○21 の小学校区は校区ネットワークでつなげる。たとえば姉妹校区をつくる。小学校区単位で利用と連携を図る。交流を図る仕掛け作り。近距離で都市農村交流する。
○下條村は若者定住を図るため、賃貸と定住の両方で生活をサポートする。中学 3 年までの医療費補助、家賃補助で出生率がアップしている。条件として自治会加入を求めている。
○八尾では旧八尾人、新八尾人、原八尾人がいるという話がある。和泉も同様で市民がまざりあっていない。北部、中部、南部に 3 つのリージョンセンターが必要という考え方を改める必要がある。
○地域の祭りに新住民が参加できる仕組み。京都祇園祭に参加できるマンションがある。

⑩まちづくりの仕掛け

○和泉市をよくしたいと少し思っている人に火を付ける、大学と一緒にやってみるなどの支援が望ましい。
○リタイア層の人がやる気を持てるのかどうか。
○大学連携指針：桃山学院大学との連携協定等。
○市民や地元企業などによるビジョン委員会設立の検討。
○全世代が参加することが重要である。（若い人の社会参加、脱孤立子育て、元気高齢者、地域世代のつながりなど）
○子育てに各世代がかかわる、つながるまちを目指す。
○大学との連携では、桃山学院大学では地域の寄り合い場に寸劇を見せに行っている。
○かけ声で市民は一つになれる。
○指定管理を地元に委託するためには、選考条件に地元の情報を熟知していることを追加すれば良い。
○市民ぐるみで、今後 10 年間の道を決めることが大切。
○茨木市の千提寺地区は都心部まで来るまで 15 分という位置にありながら住民の流出が続いている。

智頭町は 110 件あった養蚕農家が現在 3 件まで減少している。まつりは帰省して参加する。中心部から 10 分くらいの集落。大阪から移住した人がカフェを開き成功している。地域作り協力隊。試験のみ。原住民。地域の元気な人が自分たちで回せるようにする。元気モンが三人寄れば何かができる。偶然が金になる。

○泉大津は病児保育できていない。NPO と協働でやればできる。市民と一緒にやることを考えれば良い。NPO をつくってもらう。市民活動センターは市民が運営する方が良い。

○後継者づくり。組織優先を今の人はいやがる。年代の壁がある。

○30～40 歳代の女性に活躍してもらう。

⑪まちの経営

○職員が行政経営を意識できるか。

○自律は、自分で決めることができること。職員の能力開発が必要。

○財政的なやりくりが出来るようになるが、自己決定が求められる。

○自主財源の確保も必要だが、支出のコントロールが重要であり、学校、上下水道、道路の整備状況、更新費用など財政への影響を認識する必要がある。

○人間の老朽化により、まちづくりの根本に手が回らなくなる。健康予防によって手は打てる。

○建物は造らないことによって老朽化を回避できる。建物の多機能化によって、他の資源（ニーズ）に回すことができる。

○人と物、10 年間で意識する。絵に描いた餅は不要で、「これはやる」ことを掲げる。

○職員の政策形成能力を高める。

○コンプライアンス重視の職員教育、アカウンタビリティで市民に説明。

○予算については知る機会あるが、決算が軽視される。

○議会も意識を改革するべきであり、決算主義により課題を洗い出すことが求められる。

○市民の多くは成果を気にしているので軸足を予算から決算に移すべき。

○自立は自治であり、地方分権は成熟化の過程で市民自治にたどり着く。

○日本では民主党が地域主権を掲げていた。自民党に代わって地方にとってはやや逆風となっている。

○地域が地域のことを考えないと人口のダム機能が働かない。

○この 10 年は 30 年を継続するための 10 年という考え方が大切。

○今、転換の舵を切ることが重要である。

○ファシリティマネジメントをしっかりやる。一般的には次に来る山を前倒しにしてピークカットする。

○量の改革が必要。広域化、多機能化など躍進プランで考えていないことを総計に盛り込む。

○総計、財政、行革を一体化する。行政の役割、財政計画を総計に反映する。

○地域分権によるまちづくりが人口をとどめるダムとして社会的に力を発揮することが求められる。

○PDCA の P は市民目線であるべきであり、その達成度をチェックするサイクルであるべき。

○八尾では、職員による「だったらいいな委員会」が設けられ、子育て施策を徹底し、子育て層の流入を促進し、税収を増やすという、めぐりめぐってハッピー政策を検討した。

⑫その他

○山間部は大阪の避暑地になる。

○「トカイナカ」のイメージが、人口が減ることを前提として、実態として感じられるまちがよい。

参考2:学識者名簿

氏名	よみがな	所属	職名
稲澤　克祐	いなざわ　かつひろ	関西学院大学　経営戦略研究科	教授
今川　晃	いまがわ　あきら	同志社大学　政策学部　総合政策科学研究科	教授
加藤　晃規	かとう　あきのり	関西学院大学　総合政策学部都市政策学科	教授
角野　幸博	かどの　ゆきひろ	関西学院大学　総合政策学部　都市政策学科	教授
金川　めぐみ	かながわ　めぐみ	和歌山大学　経済学部	准教授
上甫木　昭春	かみほぎ　あきはる	大阪府立大学　生命環境科学部,生命環境科学研究科,生命環境科学域	教授
永松　伸吾	ながまつ　しんご	関西大学　社会安全学部	准教授
久　隆浩	ひさ　たかひろ	近畿大学　総合社会学部環境系専攻　都市計画・環境デザイン研究室	教授
藤田　忍	ふじた　しのぶ	大阪市立大学大学院　生活科学研究科・生活科学部	教授
松端　克文	まつのはな　かつふみ	桃山学院大学　社会学部	教授
村田　智美	むらた　ともみ	龍谷大学　社会学部　地域福祉学科	特任講師

順不同、敬称略

参考3:ヒアリング及び専門部会の経緯

(1)第 1 回ヒアリング

氏名	日時	場所
稲澤　克祐	2014 年 9 月 10 日(火)	関西学院大学
今川　晃	2014 年 9 月 12 日(金)	同志社大学　京都今出川キャンパス
加藤　晃規	2014 年 9 月 5 日(金)	アトリエ(大阪市内東淀川区三国)
角野　幸博	2014 年 10 月 8 日(水)	ドーンセンター(大阪市内)
金川　めぐみ	2014 年 10 月 6 日(月)	和歌山大学
上甫木　昭春	2014 年 9 月 4 日(木)	大阪府立大学大学院
永松　伸吾	2014 年 9 月 4 日(木)	関西大学　高槻ミューズキャンパス
久　隆浩	2014 年 9 月 9 日(月)	近畿大学
藤田　忍	2014 年 9 月 19 日(月)	大阪市立大学
松端　克文	2014 年 9 月 30 日(月)	桃山学院大学
村田　智美	2014 年 10 月 1 日(水)	龍谷大学　研究室

(2)第 2 回ヒアリング

氏名	日時	場所
稲澤　克祐	2014 年 10 月 21 日(火)	関西学院大学梅田キャンパス
今川　晃	2014 年 11 月 4 日(火)	同志社大学　京都今出川キャンパス
加藤　晃規	2014 年 10 月 31 日(金)	アトリエ(大阪市内東淀川区三国)
角野　幸博	2014 年 10 月 25 日(土)	和泉市役所
金川　めぐみ	2014 年 10 月 31 日(金)	和歌山大学
上甫木　昭春	2014 年 10 月 31 日(金)	大阪府立大学
永松　伸吾	2014 年 11 月 4 日(火)	関西大学　高槻ミューズキャンパス
久　隆浩	2014 年 11 月 7 日(金)	近畿大学

藤田　忍	2014 年 11 月 10 日(月)	大阪市立大学
松端　克文	2014 年 11 月 12 日(水)	桃山学院大学
村田　智美	2014 年 11 月 6 日(木)	龍谷大学

(3)専門部会

【第 1 回】

日　時:平成 26 年 12 月 17 日(水)、10:00～12:00

場　所:大阪市立総合生涯学習センター、第 9 研修室

学識者専門部会委員

氏　名	所　属
稲澤　克祐	関西学院大学　経営戦略研究科
角野　幸博	関西学院大学　総合政策学部　都市政策学科
永松　伸吾	関西大学　社会安全学部

順不同、敬称略

【第 2 回】

日　時:平成 26 年 12 月 26 日(金)、10:00～12:00

場　所:大阪市立総合生涯学習センター、第 4 研修室

学識者専門部会委員

氏　名	所　属
今川　晃	同志社大学　政策学部　総合政策科学研究科
久　隆浩	近畿大学　総合社会学部環境系専攻　都市計画･環境デザイン研究室
村田　智美	龍谷大学　社会学部　地域福祉学科

順不同、敬称略

【第 3 回】

日　時:平成 26 年 12 月 26 日(金)、13:00～15:00

場　所:大阪市立総合生涯学習センター、第 4 研修室

学識者専門部会委員

氏　名	所　属
加藤　晃規	関西学院大学　総合政策学部都市政策学科
金川　めぐみ	和歌山大学　経済学部
藤田　忍	大阪市立大学大学院　生活科学研究科･生活科学部
松端　克文	桃山学院大学　社会学部

順不同、敬称略

【第 4 回】

日　時:平成 27 年 1 月 8 日(木)、13:00～14:30

場　所:大阪府立大学　生命環境科学

学識者専門部会委員

氏　名	所　属
上甫木　昭春	大阪府立大学大学院

敬称略